高岡市埋蔵文化財調査概報　第58冊

東木津遺跡調査概報 Ⅲ

―― 内科医院の建設にともなう関口地区の発掘調査 ――

2004年 3月

高岡市教育委員会

序

高岡市域におきましては、旧石器時代から近世にいたるまでの、幅広い年代の埋蔵文化財包蔵地が所在します。このうち、古代の遺跡としましては「越中国府関連遺跡」が最も注目をされてまいりましたが、発掘調査の進展にともない、市内の各地にも注目すべき遺跡が点在することが解明されております。

本書において報告します「東木津遺跡」につきましても、これまでに、多数の掘立柱建物をはじめ、木簡や硯などといったものが検出され、高岡市を代表する遺跡であると考えられるようになってまいりました。

今回は、この遺跡の東端付近を調査しましたが、過年度における調査と同様に、多数に及ぶ古代の遺構や遺物が検出されております。したがいまして、本書の刊行は、郷土における古代史の解明をすすめるための第一歩として、大変意義深いものになると思われます。

なお、この調査につきましては、開発者である関口順三氏から、多大なご協力をいただいております。末尾になりますが、心より感謝申し上げます。

平成16年３月

高岡市教育委員会

教育長　　細呂木　六良

例　言

１．本書は、高岡市東木津遺跡における発掘調査の概要報告書である。

２．当該事業は、関口順三氏による内科医院の建設工事にともない実施したものである。

３．発掘調査は、高岡市教育委員会・関口順三氏・北陸航測㈱３者協定のもとに実施した。

４．調査関係者は次のとおりである。

高岡市教育委員会　文化財課

課長：大石　茂　　副主幹：本林 弘吉　　主任：根津 明義

北陸航測株式会社　文化財課

課長：宮森 俊英　　調査員：守田　睦

５．調査は、高岡市教育委員会の根津明義による指導のもと、北陸航測㈱の守田が実施した。

６．本書の執筆にあたっては、根津・宮森・守田の３者が分担した。

７．本書においては、下記の記号を用いて各遺構の種別をあらわした。

ＳＡ：柵址　ＳＢ：掘立柱建物址　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑　ＳＰ：ピット

ＳＸ：その他

８．本書における各遺物番号は次のとおりである。

101～須恵器　201～古代土師器　301～陶磁器類　401～木製品　501～石製品

601～古墳土師器

【調査参加者】

屋外調査

池田 昌美　石田 哲雄　新保 勝正　中田 郁子　福本 繁　藤井 美紀

山田 次男　吉岡 徹

室内調査

池田 昌美　上野 由美子　中田 郁子　藤井 美紀

高岡市埋蔵文化財調査概報　第58冊

東木津遺跡調査概報Ⅲ

目　　次

序　　説

遺跡概観 …… 1

調査にいたる経緯 …… 2

調査の経過 …… 2

グリット …… 2

基本層序 …… 2

本　　文

検出遺構 …… 4

出土遺物 …… 6

総　　括 …… 13

挿　　図

図１．東木津遺跡（関口地区）・調査区位置図 …… 1

図２．東木津遺跡（関口地区）・調査区全体図 …… 3

遺物実測図

図面101．須恵器・蓋、杯、椀、墨書土器、転用硯

図面102．須恵器・杯類ほか

図面103．須恵器・壺、製塩土器、支脚、羽口、砥石、火切杵

図面104．土師器・杯、椀、甕類

図面105．土師器・甕、壺、蓋、高杯、器台ほか

写真図版

図版101．第１調査区遺構検出状況（南西から）

図版102．第１調査区全景（南東から）

図版103．第１調査区全景（南西から）

図版104．第２・３調査区全景（南西から）

図版105．調査区中央部（南東から）

図版106．作業風景

図版107．遺物写真（須恵器，土師器）

図版108．遺物写真（古代　須恵器・杯）

図版109．遺物写真（古代　土師器・甕，鉢）

図版110．遺物写真（鉄鉢形土器，羽口，製塩土器，支脚）

図版111．遺物写真（古墳時代　土師器・甕，壺ほか）

序　　説

遺跡概観

東木津遺跡は、高岡市街地の中央からやや南西側に位置する古代を中心とする遺跡である。周辺は佐野台地とよばれる庄川扇状地の先端付近にあたり、標高約11～12mの微高地となっている。遺跡の東方においては概ね旧庄川（千保川）が流れており、地形的には概ね同河川をめざすように下り勾配で続く。一方の西側では、古代において水路として活用されていたと推定されている祖父川が北流する〔根津2000〕。

東木津遺跡の近隣には、石塚遺跡をはじめ、下佐野遺跡・泉ヶ丘遺跡・木津神社遺跡等が所在しており、一つの遺跡群が形成されている。これら個々の遺跡の調査結果から、当地区は縄文時代後期に始まり、以後は若干の断続期間を有しながらも、概ね近世まで歴史的様相が存続する。また、上記の石塚遺跡では、古墳時代においては小規模ながらも古墳群を形成しており、以上を勘案するならば、当地周辺においては在地的かつ拠点的集落景観がひろがっていた可能性があるかと思われる〔根津2004〕。

東木津遺跡における近年の発掘調査成果によれば、同遺跡は、古代において官衙的な活動がとり行われていたものと考えることができる。現在、この遺跡をめぐっては、荘園や布師郷との関連を指摘する意見があるほか〔高岡市教委2001〕、在地集落を基盤として一時的に郡衙等の出先機関として機能したとする説〔根津2004〕などが提起されているが、その歴史的具体相については、詳細かつ多角的な視点からの検討を経る必要があると思われる。

（根津）

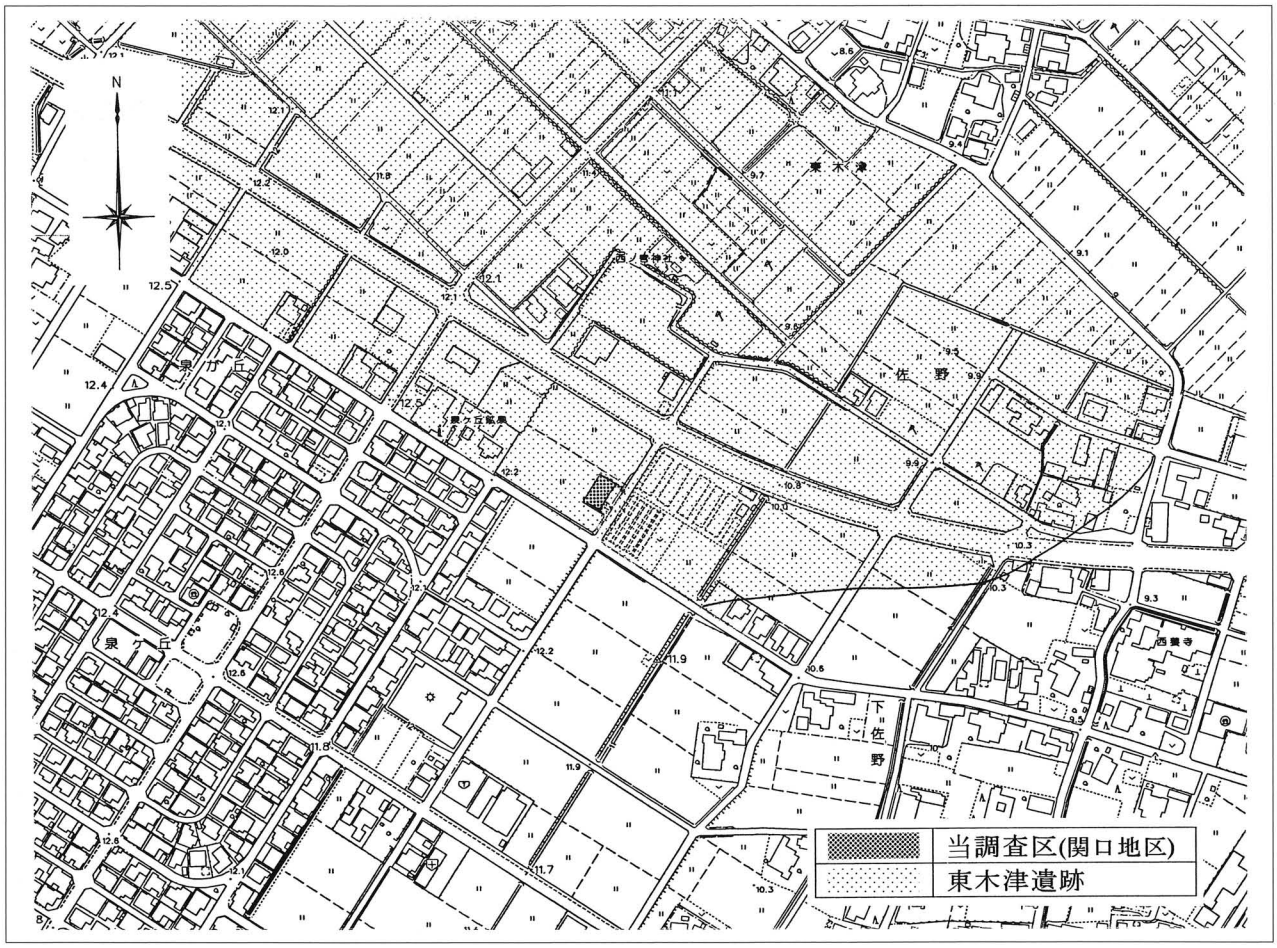


図１．東木津遺跡（関口地区）・調査区位置図　（高岡市都市計画基本図に加筆　　縮尺1/5,000）

調査にいたる経緯

今回の調査は、関口順三氏が高岡市佐野892の地に内科医院の建設を計画したことに端を発するものである。しかし、当該地は東木津遺跡の包蔵地として周知されていたことから、開発を行う際には、事前に埋蔵文化財の有無を確認するとともに、その所在が明らかとなった場合には、何らかの方法でその保護措置を行う必要性があった。そこで、さしあたり試掘調査を実施し、その結果をふまえたうえで以後の対応を検討することとしたが、その結果、当該地からは多数の遺構や遺物が検出され、上記の開発を行う前には本調査を実施することが妥当と判断された。

なお、今回の事例については、類例的に原因者負担を依頼する内容であったほか、突発的に発生した事案であったことから、行政的には一定の事務的経過をふむ必要があった。ところが、関口氏からは早急な対応をしてほしいとの要望が出されたことから、再び協議の場がもたれたが、同氏と高岡市教育委員会、それに委託業者である北陸航測株式会社の３者協定のもとに本調査を実施することで合意にいたり、発掘調査に着手した次第である。

（根津）

調査の経過

発掘調査は平成15年５月12日から同年６月４日まで実施した。当初はとくに調査区を小分けする予定はなかったが、表土及び遺物包含層の掘削をはじめたところ、多量の湧水がみられ、発掘調査の継続が困難となったことから、最も湧水等の激しい地点を一旦埋め戻し、比較的この心配のない部分から調査を行なうこととした。その結果、調査区南東部の約171㎡を第１調査区とし、残りの約112㎡については、さらに第２・３調査区と小区分して調査を実施することとした。

調査は概ね第１調査区から番号順に行ったが、内容的には、表土や遺物包含層を皮切りに、以下、遺構確認・遺構の掘削、そして各種記録等といった通常の作業を行った。調査面積は283㎡である。室内整理調査については概ね屋外調査の終了後に行った。

（宮森）

グリット

当調査区におけるグリットは、既往の発掘調査との整合をはかるため、それらと同軸のものを設定した。基本的には一辺10ｍ四方を一区画としたが、適宜５ｍメッシュを補助的に追加設定した。

（守田）

基本層序

今回の調査区における基本層序は次のとおりである。遺構は所謂「地山」と呼ばれる土層の上面で確認した。地山までの深さは現地表面から約50～60㎝をはかる。概して東方から西方にむけて緩やかに地山上面が傾斜する。

第１層：　耕作土（昭和40年代の圃場整備以後の耕作土）

第２層：　黒色粘質土層・黒褐色粘質土層（古墳時代・古代・中世の遺物を包含）

第３層：　地山

※　ただし、遺構の残存状況等を鑑みるならば、第２層についても後世の攪乱を受けている可能性がある。（宮森）

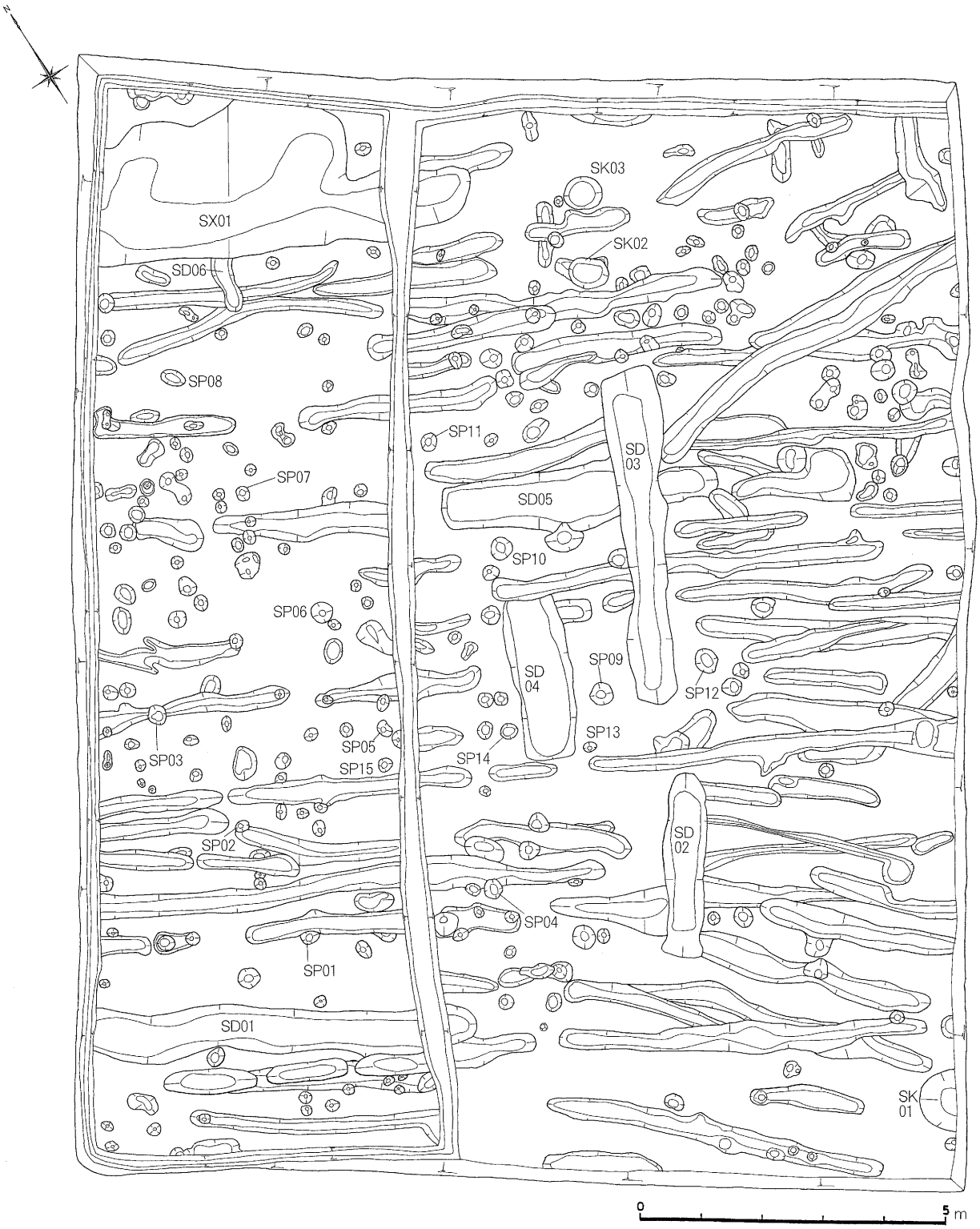


図２．東木津遺跡（関口地区）・調査区全体図　　縮尺1/100

検出遺構

今回の調査区からは多数の遺構が検出された。特に顕著に検出されたのは畝状遺構とピットであるが、前者が密集することについては、当地が微高地であることと関連するものと思われる。ちなみに、畝状遺構については、方向を違えて数通りのグループに分類しうることから、周辺の調査区から検出された畝状遺構と比較すると、やや長期にわたる存続期間を有する可能性があるかと思われる。

このほか、調査区からは畝状遺構を切るかたちで、北東から南西の方向に主軸を設ける溝状遺構ＳＤ02や同03が検出されている。また、部分的な検出にとどまったものの、調査区の北西部で検出されたＳＸ01からは、残存率の高い古代の遺物が集中的に出土している。この遺構から出土した遺物の年代は、８世紀後半代から９世紀前葉であり、東木津遺跡が官衙的な様相を呈していた時期と一致する。

また、調査区からは多数のピットも検出されており、最大解釈ながらも、このうちのいくつかは掘立柱建物址をおもわせるような配置をとるものがある。しかし、調査区の全域に密に分布する畝状遺構等との切り合いにより、この組み立てが困難であったことから、本書においては掘立柱建物址についての論述は避けることとした。

検出遺構が多数に及ぶため、その全てを解説することはできないが、以下では、このうちの主要なものについて解説していくことにする。

土坑　ＳＫ01

調査区南端付近で検出された土坑である。片側が調査区外へと達するため、その全貌は明らかではない。一案としては、その規模からして溝状遺構となる可能性もあるかと思われる。ただし、その場合はＳＤ01らとセットをなし、区画溝となる可能性もある。遺構の深さは確認面から約26cmをはかり、断面形はＶ字形を呈する。覆土は黒褐色土（Hue2.5Y5/6）を呈する単一層である。遺物は出土していない。

土坑　ＳＫ02

調査区の北側で検出された土坑である。長軸約61cm，短軸約50cmをはかる楕円形の土坑である。遺構の深さは確認面から約９cmをはかり、断面形は浅い皿型を呈する。覆土は黒褐色土（Hue2.5Y3/1）を呈する単一層であるが、鉄分が少量混入する。古墳時代前葉の土師器（図面105－603～605、609）がまとまって出土したほか、図示はしていないが古代の杯も出土している。また、本祉は重複する遺構と切り合っているが、時期的には本址の方が新しい。

土坑　ＳＫ03

調査区の北部で検出された土坑である。長軸・短軸とも約60cmを呈する円形の土坑である。遺構の深さは確認面から約10cmをはかり、覆土は黒褐色土（Hue2.5Y3/1）を呈する単一層であり、断面形は緩やかな逆台形を呈する。遺物の出土はない。

溝状遺構　ＳＤ01

調査区の南西隅で検出された溝状遺構である。方位的には北西方向から南東方向へとはしる。片側が調査区外へと達するため遺構の全貌などは不明であるが、現状においては全長約6.4m，幅約60～80cm，深さは確認面から約21cmをはかる。覆土は黒褐色粘質土（Hue2.5Y3/1）の単一層であり、断面形は逆台形状を呈する。古墳時代前期の甕等のほか、古代の須恵器の杯Ｂ蓋（図面101－102）が出土している。

溝状遺構　ＳＤ02

調査区の中央よりもやや南側で検出された溝状遺構である。北東から南西の方向に直線的にはしる。現状では全長約3.1m，幅50～60cm，深さは遺構確認面より約43cmをはかる。本祉は周辺に位置する畝状遺構を切る。覆

土は黒褐色粘質土（Hue2.5Y3/1）の単一層であり、断面形は逆台形状を呈する。古墳時代前期のほか、８世紀後半から９世紀前半にかけての須恵器の杯類や土師器の甕などが出土している。

溝状遺構　ＳＤ03

調査区の中央からやや東側で検出された溝状遺構である。北東から南西の方向に直線的にはしる。現状においては全長約5.6m，幅50～90cm，確認面からの深さは約26cmをはかる。平面的に重複する畝状遺構を切っている。覆土は黒褐色粘質土（Hue2.5Y3/1）の単一層であり、断面形は逆三角形状を呈している。

この覆土からは、８世紀後半代から９世紀前半代のものと思われる須恵器の杯Ａ（図102－135）古墳時代前葉及び古代の土師器が出土している。

溝状遺構　ＳＤ04

調査区のほぼ中央部において検出された溝状遺構である。北東から南西の方向に直線的にはしる。北東端が周辺の畝状遺構に切られているため全貌などは不明であるが、現状においては、全長約2.7m，幅90～100cm，深さは確認面より約13cmをはかる。

覆土は黒褐色粘質土（Hue2.5Y3/1）の単一層であり、断面形は皿状を呈する。鉄鉢形土器（図面102－138）のほか、土師器の細片等が出土している。平面的に重複する畝状遺構ないし溝状遺構を切っている。

溝状遺構　ＳＤ05

調査区の中央部よりやや北側で検出された溝状遺構である。西北から東南方向に直線的にはしるが、一部はＳＤ03によって切られている。現状においては全長約2.9m，幅0.7～1.1m，深さは確認面から約16cmをはかる。覆土は黒褐色粘質土（Hue2.5Ｙ3/1）の単一層であり、断面形は皿状を呈している。年代不明の土師器の甕の底部のほか、古代における須恵器の杯類が出土している。

溝状遺構　ＳＤ06

調査区の北端付近で検出された溝状遺構である。ＳＸ01に切られており、その全容は不明確である。現状においては全長約90cm，幅約40cm，深さは確認面より約５cmをはかる。覆土は灰褐色粘質土（Hue2.5Y3/1）の単一層であり、断面形は皿状を呈する。古代における須恵器の大甕のほか、土師器の杯類や甕（図面104－206）が出土している。

遺物集積遺構　ＳＸ01

調査区南部において検出された遺物集積遺構である。形状そのものは西北－東南方向にはしる溝状遺構であるが、溝の東南端から約20cmの地点で溝幅が約２倍に膨らみ、かつテラス状の部分を挟んで調査区西北部へと続くものとなっている。西北側が調査区外へと達するものの、現状においては全長約6.1m，幅0.9～2.6m，深さは確認面から約26cmをはかることが確認される。周囲に位置する畝状遺構ＳＤ06と切り合うが、本址がこれを切っている。

覆土は黒褐色粘質土（Hue2.5Y3/1）を基本とするが、床に近いところでは炭化物が検出されている。断面形は逆台形状を呈している。古墳時代前期と古代（８世紀後半代から９世紀前半代）の遺物が多量に出土している。他の遺構と比べ、遺物の出土量が著しく多いことから、意図的にこの場所に投棄した可能性があるかと思われる。

なお、出土遺物については須恵器や土師器の杯類（図面101～105－106～109、111、113、116、118～121、124、125、128、131、132、134、136、137、143、202、209）のほか、転用硯として利用された稜椀（図面101－117）や羽口（図面103－503）、その他製塩土器（図面101－501）や灯明皿等が出土している。

柵址　ＳＡ01

柵址ＳＡ01としたものは、調査区西側にある３条の柵址のうち、最も西側に位置するものである。方位的には南北方向にはしる。各柱穴は径25～36cmの円形を呈する。

構造的には２間（約4.5m）を有すると考えた。柱間寸法はＳＰ01－ＳＰ02間が約2.2m、ＳＰ02－ＳＰ03間が約2.3mをはかる。ＳＰ01から03は、それぞれ畝状遺構と思われる溝と切り合っているが、土層観察より、本祉の方が新しいことが把握されている。

柵址　ＳＡ02

柵址ＳＡ02としたものは、調査区西側にある３条の柵址のうちの中間に位置するものである。柵の方位はＳＡ01と平行する。柱穴の平面形は径17～32cmの円形を呈する。現状においては４間（約10m）を有することが確認されている。柱間寸法は、ＳＰ04－ＳＰ05間が2.9m、ＳＰ05－ＳＰ06とＳＰ06－ＳＰ07間がともに約2.4m、ＳＰ07－ＳＰ08は約2.3mをはかる。ＳＰ04は畝状遺構の一部と切り合っているが、ＳＰ04の方が新しいと考えられる。ＳＰ08から古墳時代前葉のものとみられる土師器片が出土している。

柵址　ＳＡ03

柵址ＳＡ03としたものは、調査区西側にある３条の柵址のうち、最も西側に位置するものである。方位は上記２条の柵址と平行する。柱穴の径は20～28cmの範囲におさまり、平面形は円形を呈する。規模は２間以上が考えられる。柱間寸法は、ＳＰ09－ＳＰ10間が約2.1m、ＳＰ10－ＳＰ11間が約1.8mをはかる。ＳＰ09からは古代のものと思われる土師器片が２点ほど出土している。

畝状遺構

今回の調査区からは、ほぼ全域にわたって畝状遺構が検出されている。規模は全長0.7m～6.0m、幅30～50cmの範囲にほぼまとまっている。方位別には、西南－北東・北西－南東・西－東の３通りに分類できる。柱穴の断面形は半円ないしＵ字状を呈し、覆土も黒褐色土（Hue2.5Y3/1）の単一層を呈することで共通する。

他の遺構との切り合い関係についてみると、西南－東北向きのものについては、柵列ＳＡ01や土坑ＳＤ02よりも古く、同様に、西－東方向を呈するものについても、平面的に重複するＳＤ03よりも古いことが確認できる。ちなみに、近隣に位置する「東木津遺跡（山崎地区）」の畝状遺構〔高岡市教委2001〕との方位関係を比較すると、わずかに同地区の南東側にほぼ同様のものが存在するのみである。（宮森）

出土遺物

須恵器（図面101～103）

当調査区からは、８世紀後半代から９世紀代の須恵器が出土している。この半数近くは性格不明遺構ＳＸ01と、その上層に位置する遺物包含層からの出土である。器種別には、杯・椀・蓋などといった食膳具のほか、壺・大甕・横瓶・鉢などの貯蔵具、さらには鉄鉢形土器や転用硯などが見受けられる。

これらのうちで最も出土量が多いのは食膳具であるが、この傾向は周辺に所在する過去の調査区の成果とも概ね一致する。鉄鉢形土器については、仏教的色彩を持った施設を含む遺跡から出土することが少なくない。また、稜椀についても同様に仏具の模倣ともいわれ、上記の鉄鉢の出土とともに、周辺には仏教的な色彩を持つ施設等の存在した可能性もあるかと思われる。

土師器（図面104～105）

当調査区からは、古墳時代前期と古代の土師器が出土している。前者については、甕・壺・高杯・蓋形土器・器台などといったもののほか、祭祀時に使用されたとみられるミニチュア土器も出土している。

ちなみに、今回の調査区からは外れるものの、試掘調査時においては当該期の土師器が多量に出土しており（注１）、やはり当調査区を含む周辺地区には、この時代の様相も展開していたと考えられる。

一方の古代の土師器については、内面黒色土器を含む杯や椀などといった食膳具のほか、甕や鉢などの煮炊き具が出土している。数量的には甕の破片が多くみられるが、後世における破損や磨耗などにより、接合はおろか、その調整法の識別さえも不明なものが多い。

製塩土器（図面103－501）

今回の調査区の北部、ＳＸ01及びその隣接部より製塩土器の破片が２点ほど出土している。内陸に位置する当地は製塩に適していないため、これが出土した経緯については、生産地ないし管理地からの移動ととらえるべきであろう。

羽口（図面103－503）

当調査区北部のＳＸ01から鞴の羽口も１点出土している。上下及び片側を欠損しており全体像は不明であるが、現状は最大長約７㎝、最大幅約6.2㎝の規格を呈する。表面の調整は粗く、器面はひび割れなどが目立つ。また、表面には火を受けた痕跡も見られる。

支脚（図面103－502）

当調査区からは、１点だけではあるが支脚が出土している。片側を欠損しているが、現状では最大長6.8㎝、最大幅2.8㎝の規格を呈する。第２区の表土掘削中に検出されており、他に供伴遺物がなかったことから、具体的な年代の特定には至らなかった。

転用硯（図面101－117、118）

今回の調査区北西部のＳＸ01から2点だけではあるが転用硯が出土している。硯として転用されていたのは８世紀中頃の須恵器の稜椀と８世紀後半から９世紀前半代にかけての須恵器杯Ｂである。底外面に磨耗された形跡と墨痕が確認できたため、共に硯として使用されたものと考えた。この存在からは、当調査区において識字層の介在したことのほか、官衙的様相が展開していたことなどが窺われよう。

赤彩土器（図面104－201、図面105－614、616、619）

当調査区からは、全時代を通じて数個体分の赤彩土器が検出されている。器種としては、古墳時代のものでは高杯ないし器台のほか、祭祀等に用いられたものと考えられるミニチュア土器が見受けられる。一方の古代においては内面黒色処理を施した杯類が１点だけ出土している。

灯明皿

当調査区の北側に位置する性格不明遺構ＳＸ01とその隣接部より２点の灯明皿が出土している。使用されているのは古代における土師器の杯や皿である。

なお、遺物が小片であったため、本書においては図化をひかえた。

砥石（図面103－504）

調査区南東部の遺物包含層から、砂岩製の砥石が１点出土している。破損のため全容は不明であるが、現状においては最大長5.4㎝、最大幅3.2㎝の規格を呈する。使用面は１面だけ確認されている。

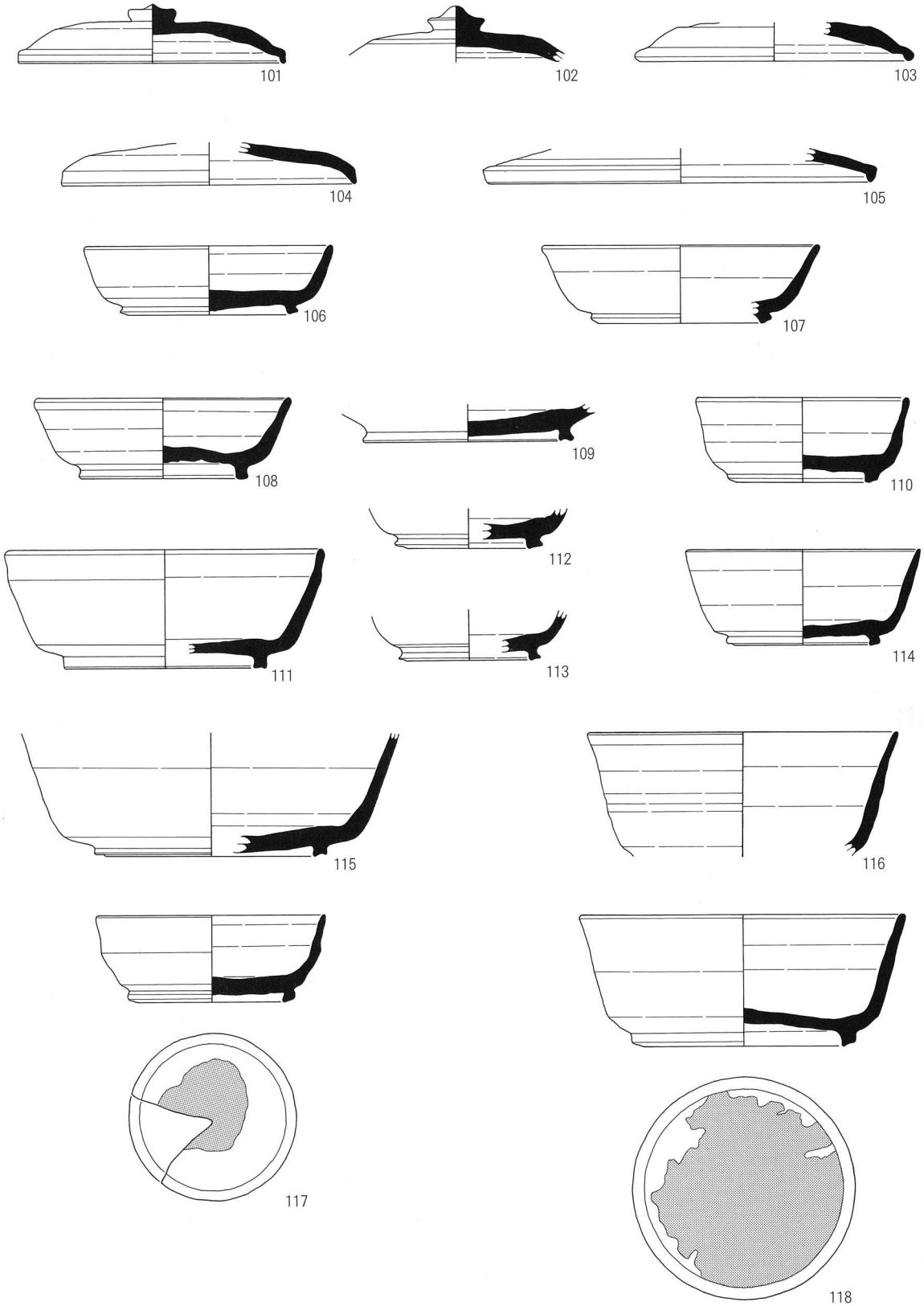
火切杵（図面103－401）

調査区の中央からやや南東部の表土層から火切杵が１点だけ出土している。破損のため全容は不明であるが、現状においては最大長5.8㎝、径0.8㎝の規格を呈する。全体的に細かく面取りがなされており、断面もほぼ円形に整えられている。片側の先端部分に焦げ目があることから、火切杵と判断した。

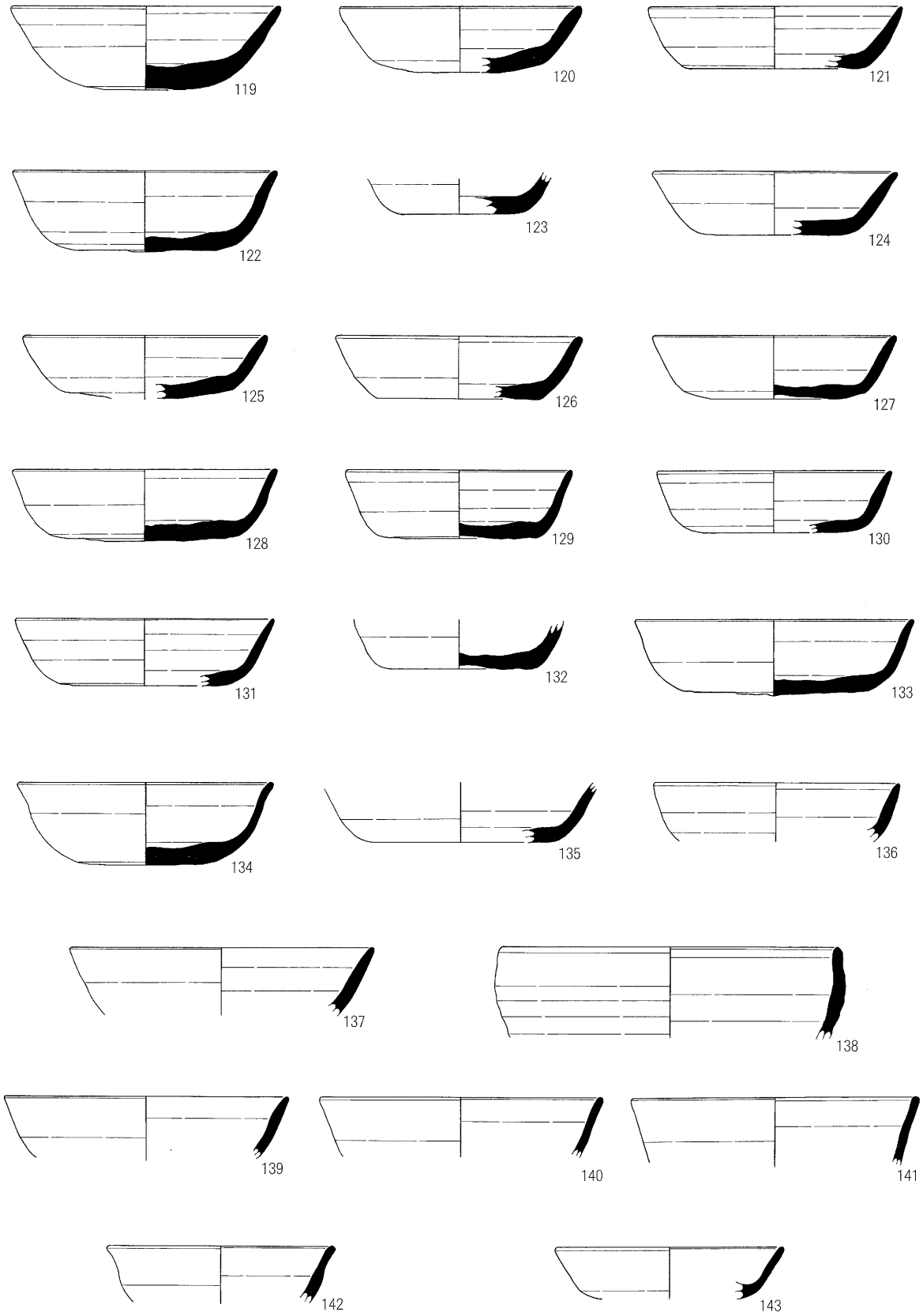
その他陶磁器類

当調査区からは珠洲の壺の破片が１点出土しているほか、越中瀬戸をはじめとする近世以降の陶磁器片も若干量出土している。いずれも細片であり、年代も不明であることから、本書においては図示等を見合わせることとした。

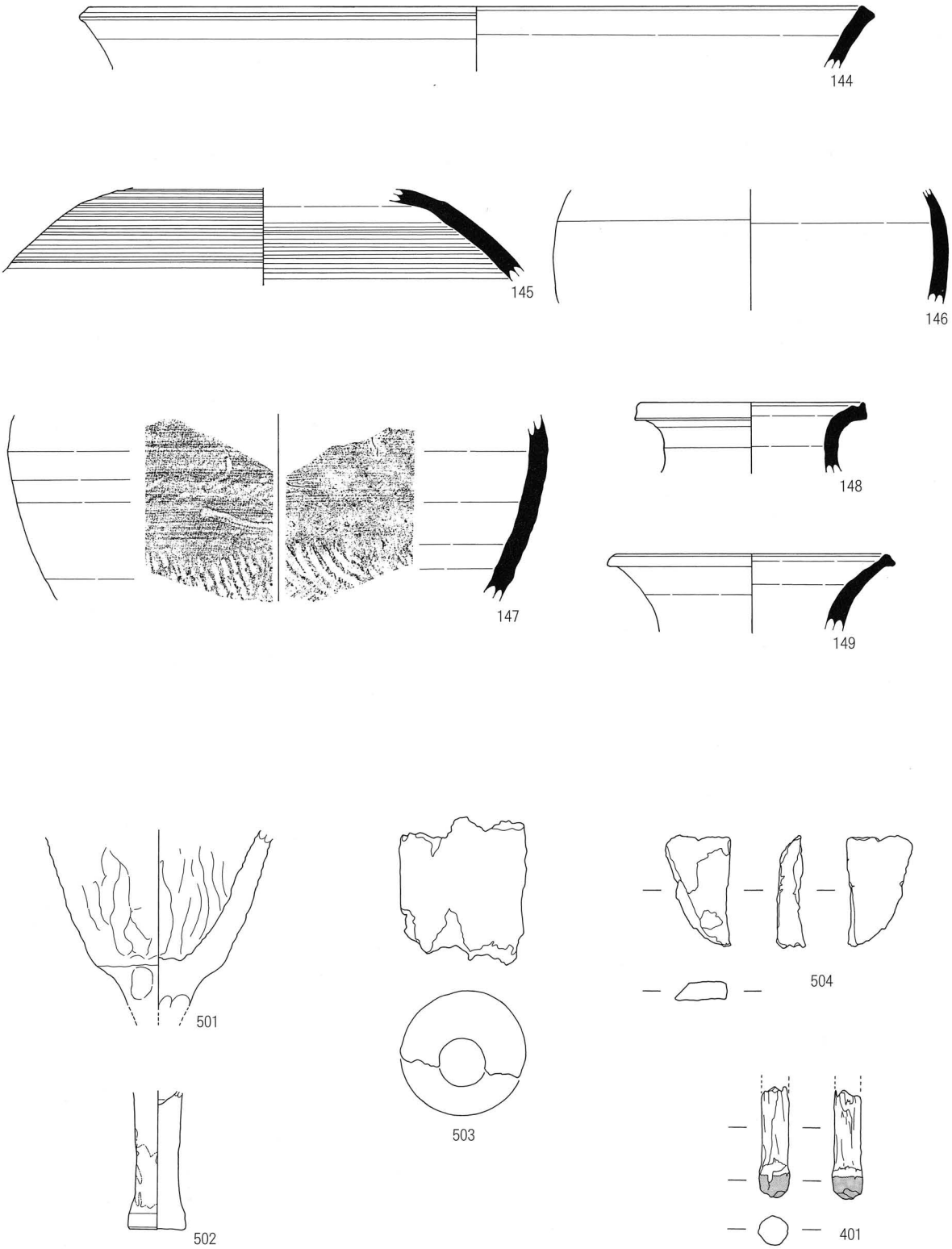
（宮森）



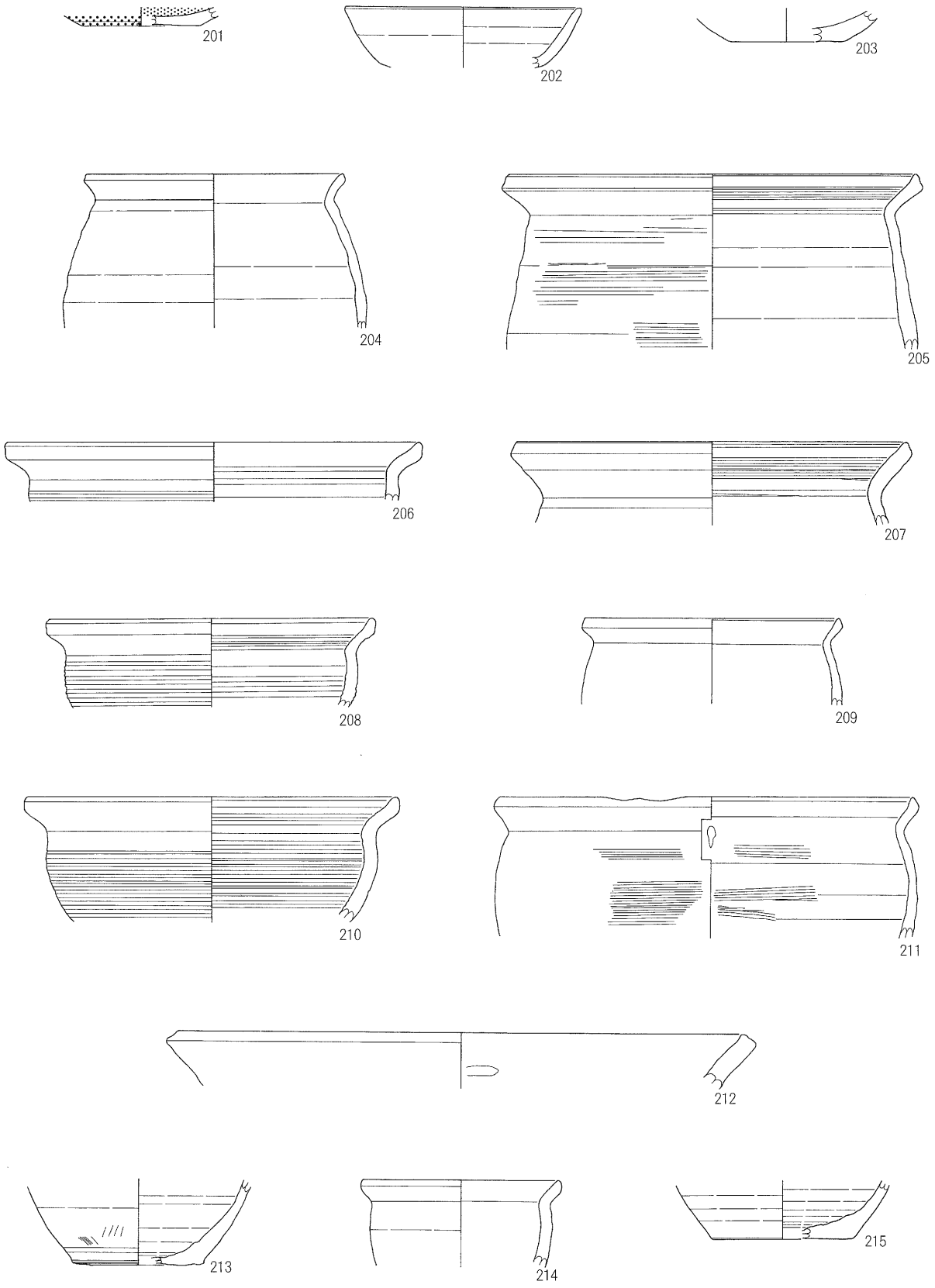
図面101．須恵器・蓋、杯、椀、墨書土器、転用硯　　縮尺1/3



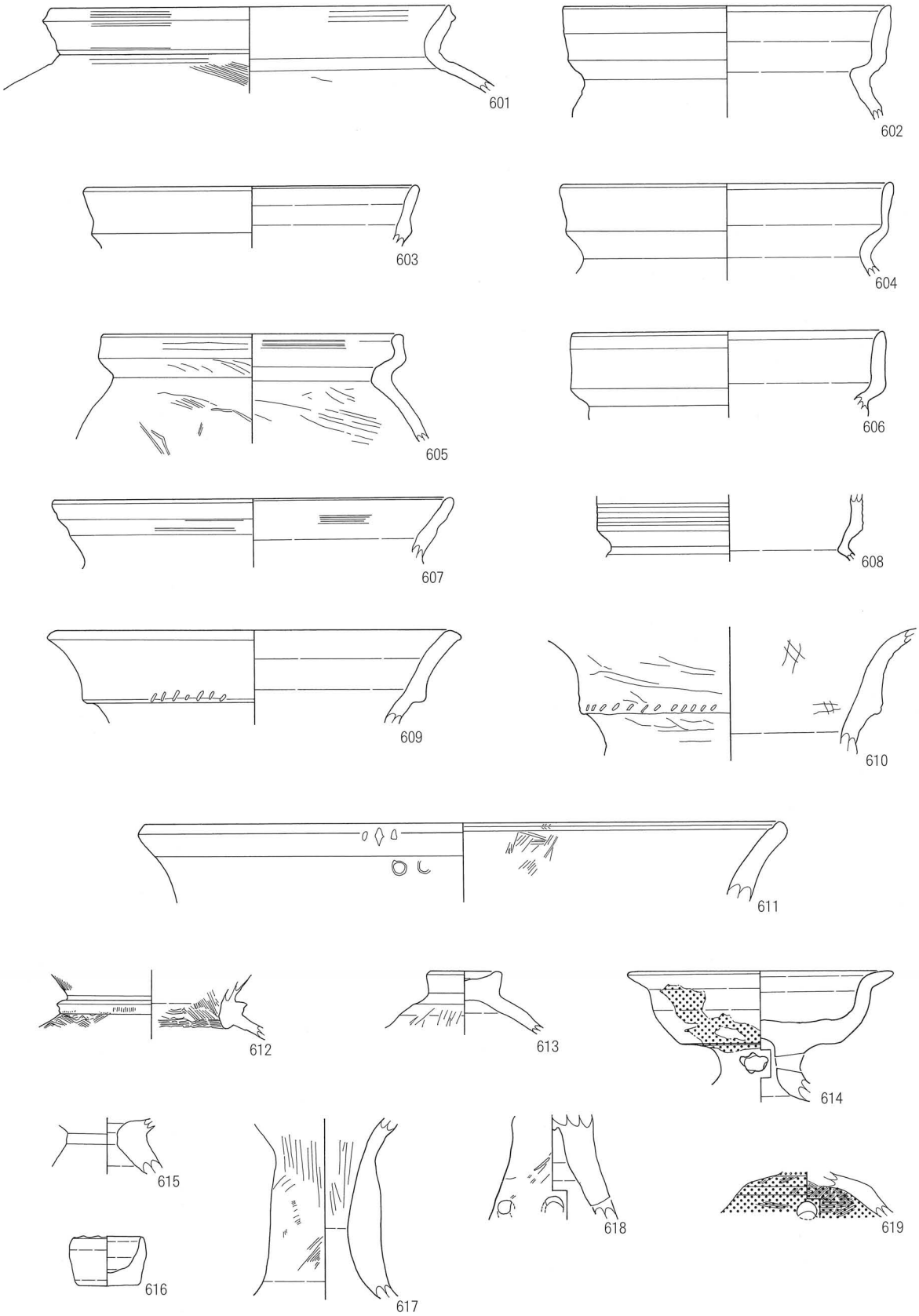
図面102. 須恵器・杯類ほか　　縮尺1/3



図面103. 須恵器・壺、製塩土器、支脚、羽口、砥石、火切杵　　縮尺1/3



図面104. 土師器・杯、椀、甕類　　縮尺1/3



図面105. 土師器・甕、壺、蓋、高杯、器台ほか　　縮尺1/3

総　　括

平成15年度に実施した、東木津遺跡「関口地区」の調査概要を述べてきた。以下ではその成果を概括し、本遺跡をめぐる課題の整理を行うとともに、今後の展望を述べることにより、今回の調査のまとめにかえることとしたい。

東木津遺跡は、高岡市石塚地区を中心にひろがる、弥生中期から近世にいたる遺跡群の一角をになうものである。今回の調査区から出土した遺物を概観するに、既往の調査区で見られたような、帯金具・皇朝銭・渡来銭・祭祀具・墨書土器・木簡などといった官衙的な遺物の出土は少ないが、転用硯をはじめ、鉄鉢や稜椀等が検出されていることから、概して当調査区においても官衙的な様相が波及していた可能性が問えるものと思われる。

東木津遺跡においては、「悔過」と記された墨書土器や瓦塔が過去の調査区から出土したことをうけ、仏教的色彩をもつ施設との関連を指摘する意見も提起されている〔高岡市教委2001〕。たしかに、金田章裕氏〔同氏1998〕や藤井一二氏〔同氏1995他〕の研究においては、当遺跡の南方に東大寺領楔田荘が比定されており、また、東木津遺跡からは過去に「庄」墨書土器も検出されていることから、上記のように仏教色を帯びていたことと相まって、同荘との関連を問う見解も提起されている〔高岡市教委2001〕。しかし、出土遺物の年代幅を勘案するに、東木津遺跡において官衙的な様相が存続していたのは、いまのところ８世紀中頃から９世紀中頃までの範囲と考えられる。したがって、同荘の存続期間とは付合しないため、同荘との関連を説くにつけては、現状ではより慎重な検討を要するといわざるをえないであろう〔根津2004〕。

一方、今回の調査区から程近い地点から、「布忍（師）郷」と焼成前に刻書された横瓶や「布師三□」なる人名とみられる文字を記す木簡などが検出されたことをうけ、周辺を同郷に比定する積極論も提起されている〔堀沢2001〕。周辺地域に点在する遺跡群の内容やあり方を概観するならば、大局的には長期の継続を呈する様相が所在したことが考えられるほか、古墳時代においては小規模ながらも古墳群が造営されていくことから、確かに周囲には在地的な様相がひろがっていた可能性もあり、上記の比定案も一案と思われる。しかし、周辺からは「氣多神宮寺」木簡をはじめ、郷レベルを超えるかのようなものも検出されていることから、既存集落の内に、国郡衙の出先機関や荘園関連施設等が一定期間複合していた可能性も考えられるなど、より詳細で、かつ広範囲にわたる検討も要するかと思われる。

現状においては、東木津遺跡の調査範囲が十分ではないため、周辺の歴史的様相をいまこの場で解くことは非常に困難であるが、この課題を達成するには、同遺跡に対し、今後もそうした視点も含めながら、詳細な検討を重ねていく必要があることを提言することで本書のまとめとする。　　（宮森）

【参考文献】

金田章裕　『古代荘園図と景観』東京大学出版会　1998

高岡市教育委員会　『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』　2001

高岡市教育委員会　「東木津遺跡（山崎地区）」『市内遺跡調査概報』ＸＩ　2001

根津明義　「越中国西部地域における東大寺領諸荘の所在について―考古学的成果を中心として―」『日本荘園絵図聚景釈文編』古代ワークショップ資料　東京大学史料編纂所　2004

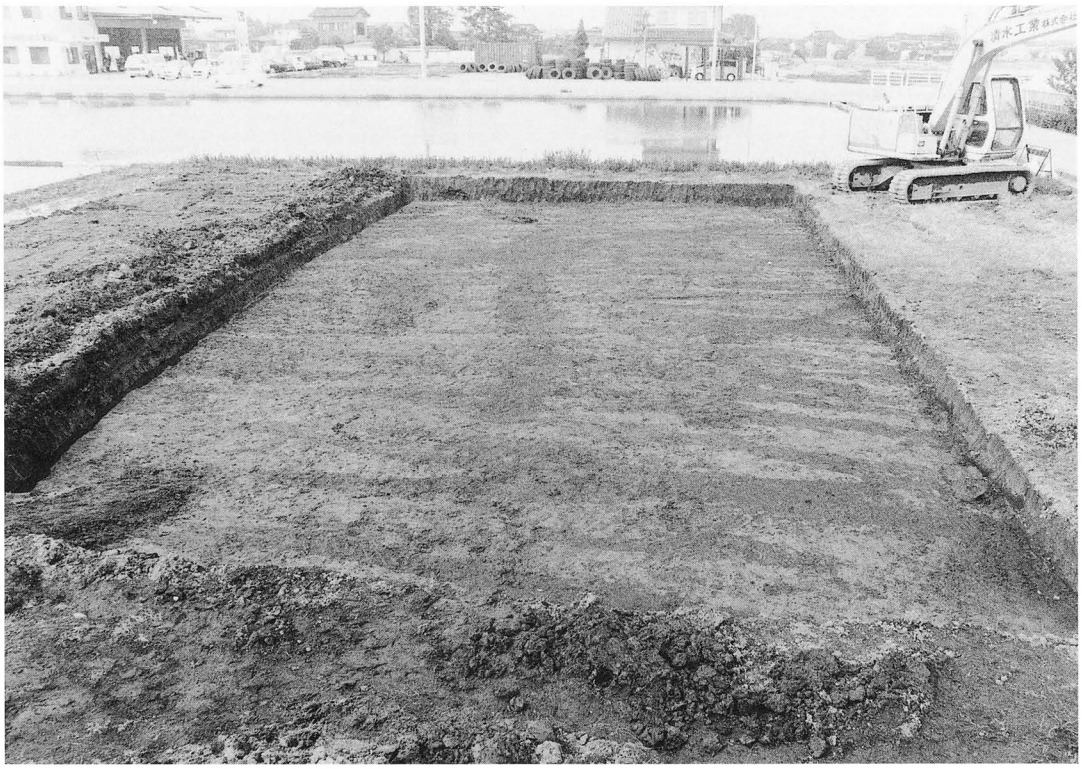
藤井一二　「楔田庄」『富山県の地名』平凡社　1995

堀沢祐一　「越中国の律令祭祀と官衙遺跡」『フォーラム古代北陸の国と郡の成り立ち』第２回「富山の奈良時代を探る」フォーラム資料　2001

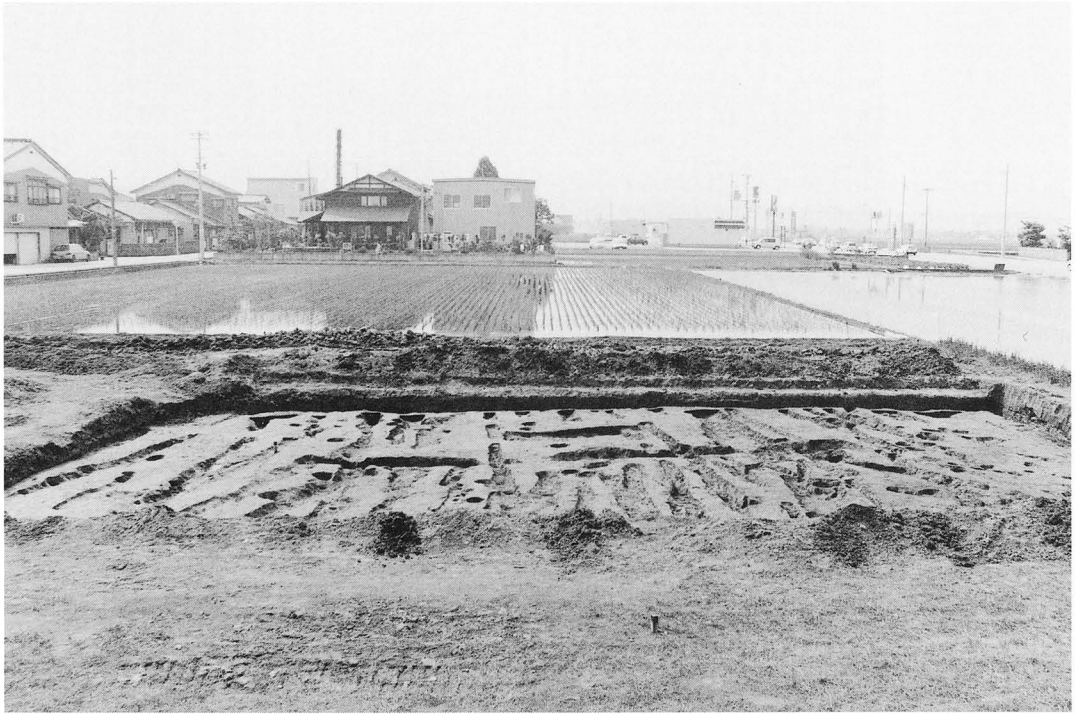
注１．試掘調査担当者から御教示を得た。

注２．本書における土層の識別においては、『新版　標準土色帖』を利用した。

図　版　編

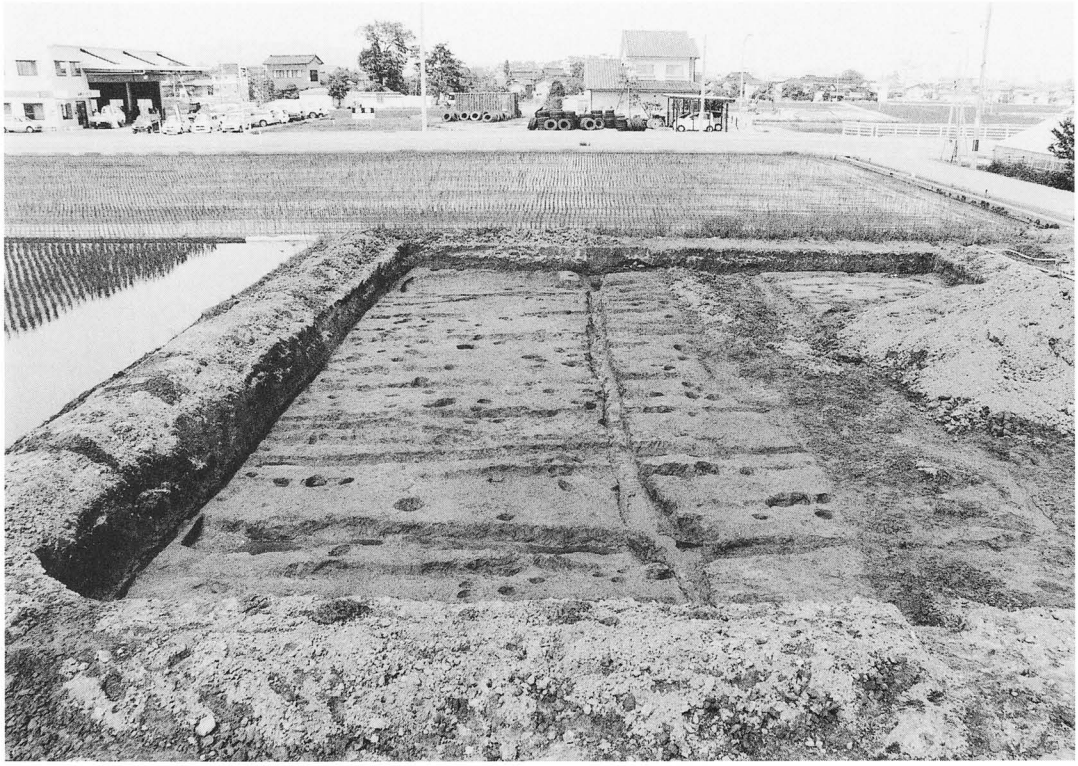


図版101．第1調査区遺構検出状況（南西から）

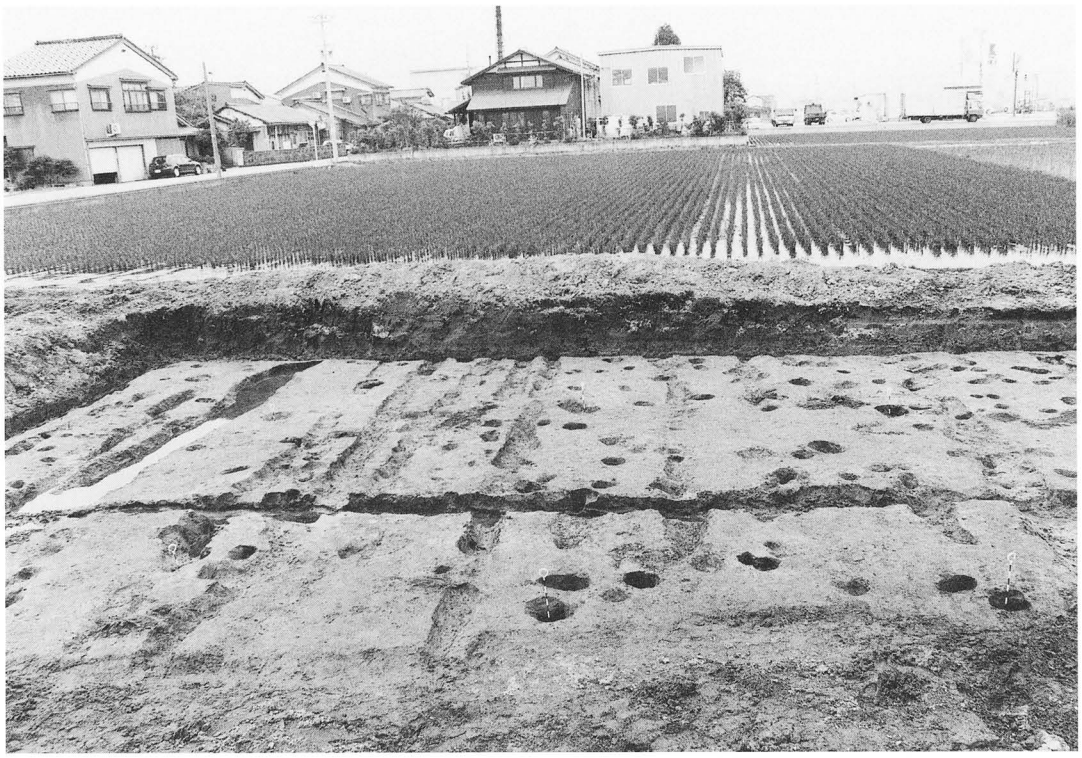


図版102．第１調査区全景（南東から）

図版103．第1調査区全景（南西から）

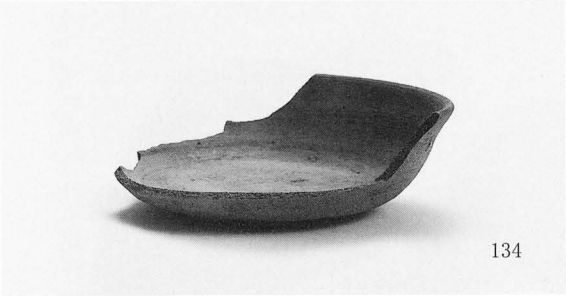


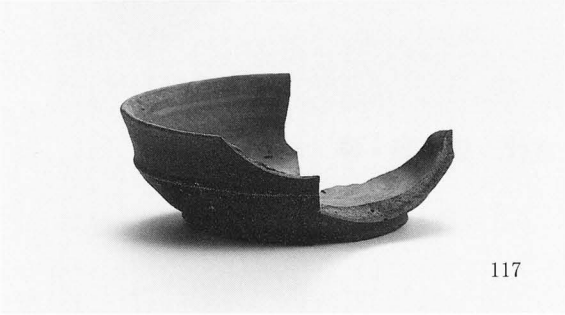
図版104．第２・３調査区全景（南西から）

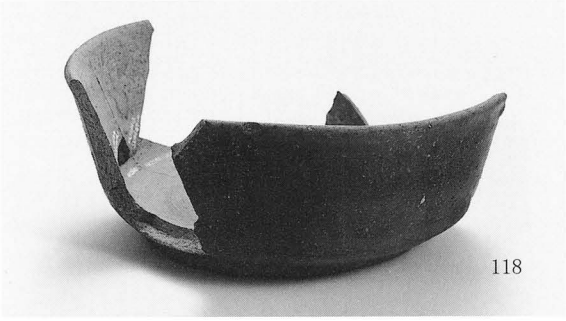


図版105．調査区中央部（南東から）

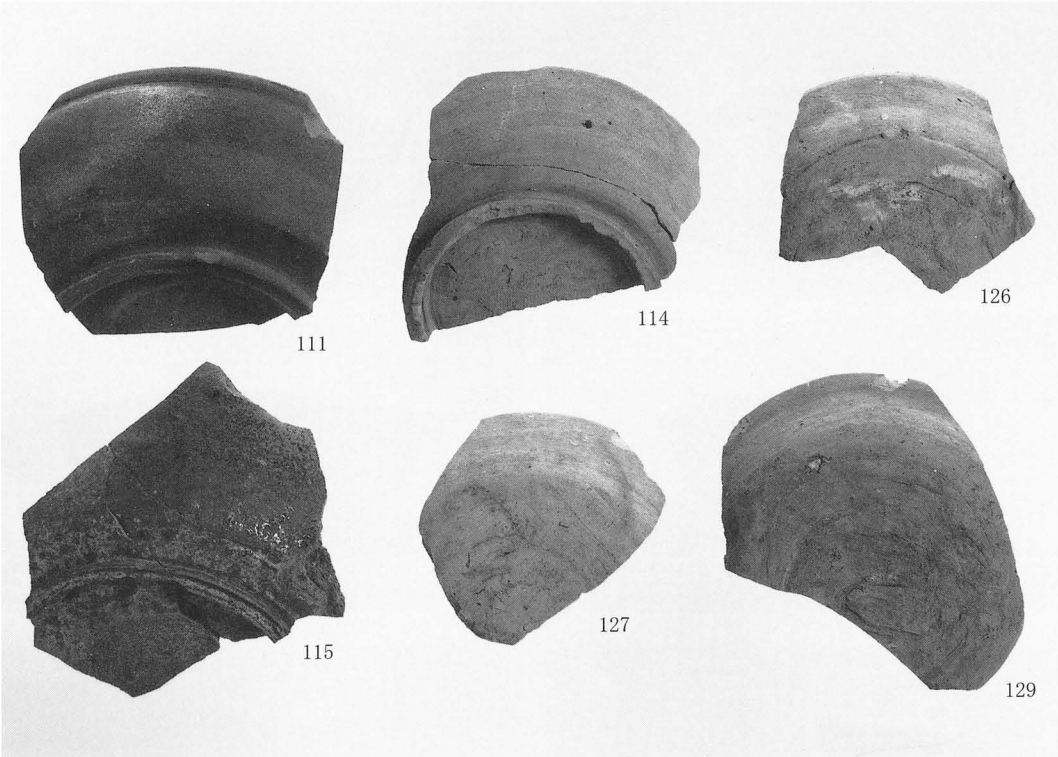
図版106．作業風景



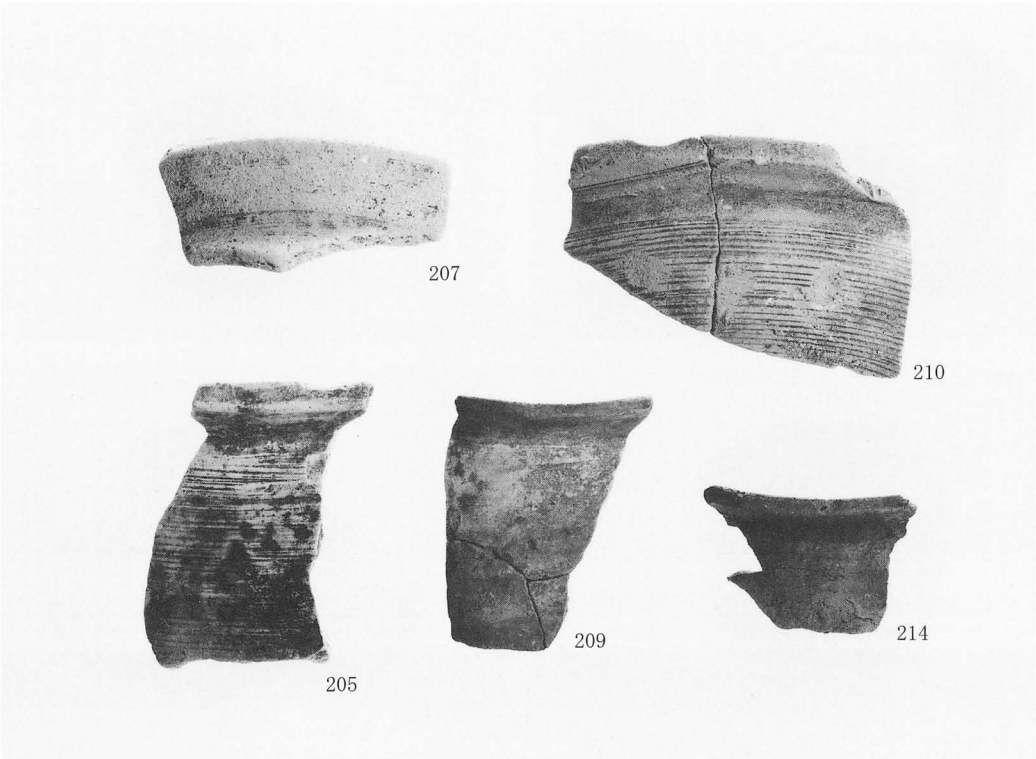




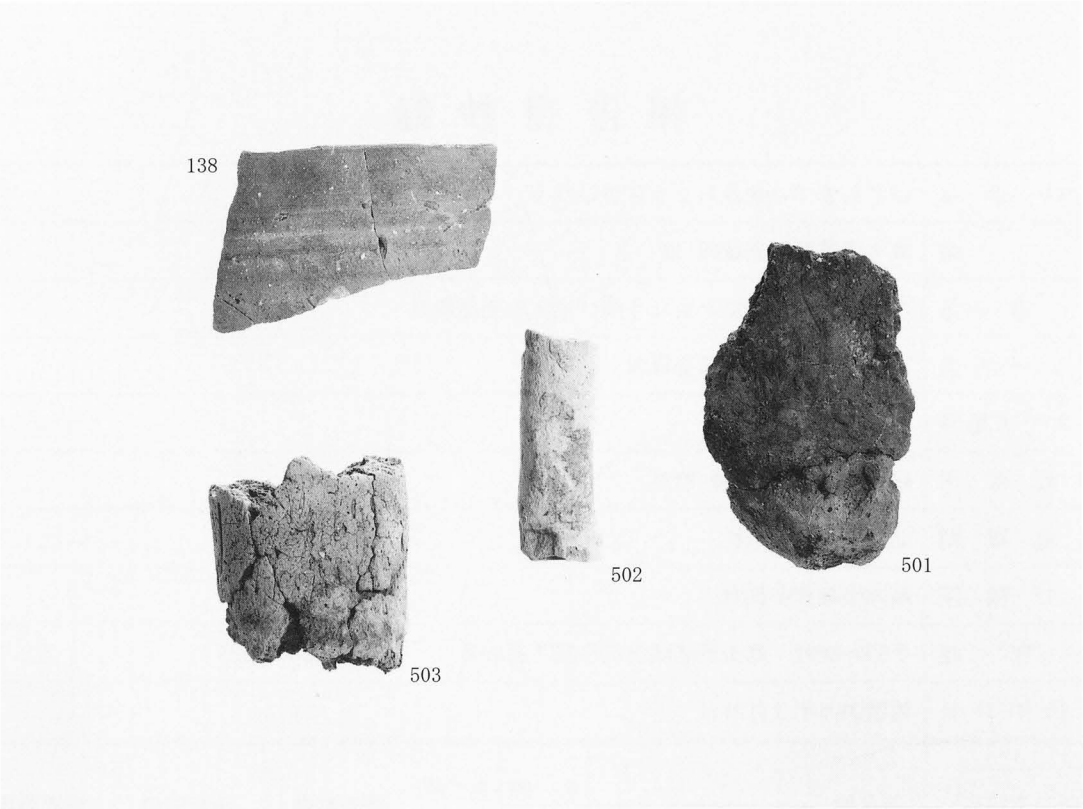
図版107．遺物写真　須恵器，土師器



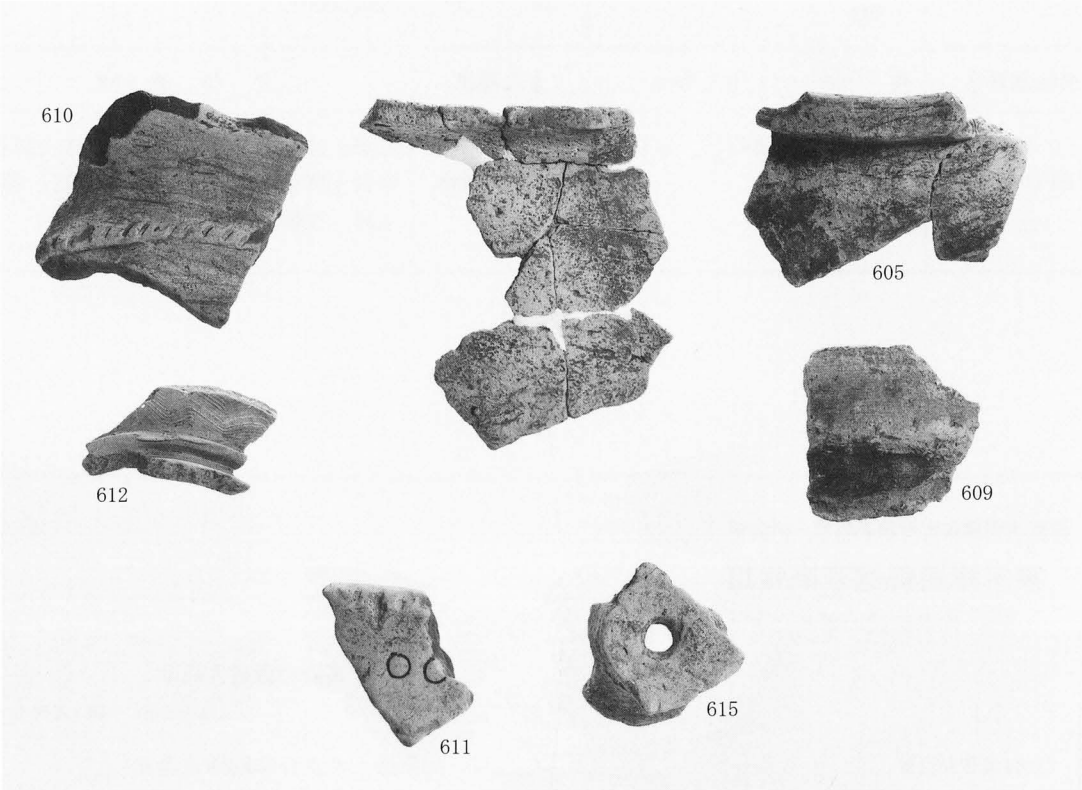
図版108．遺物写真　古代　須恵器・杯



図版109．遺物写真　古代　土師器・甕，鉢



図版110．遺物写真　鉄鉢形土器，製塩土器，支脚



図版111．遺物写真　古墳時代　土師器・甕，壺ほか

報告書抄録

ふりがな	ひがしきづいせきちょうさがいほう
書名	東木津遺跡調査概報 Ⅲ
副書名	内科医院の建設にともなう関口地区の発掘調査
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第58冊
編集者名	根津 明義　宮森 俊英　守田 睦
編集機関	北陸航測株式会社
発行機関	高岡市教育委員会
所在地	〒933-8601　富山県高岡市広小路７番50号　℡0766－20－1463
発行年月日	西暦2004年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東木津遺跡（関口地区）	富山県高岡市佐野892	01602	202150	36°43′49″	136°59′28″	20030512～20030604	283㎡	内科医院の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
東木津遺跡（関口地区）	官衙集落	古墳時代，古代，中世	土坑，溝状遺構，畝状遺構，その他	古墳土師器，古代須恵器，古代土師器，中世土師器，青磁，珠洲，砥石，製塩土器，支脚，その他陶磁器類

高岡市埋蔵文化財調査概報　第58冊

東木津遺跡調査概報Ⅲ

―― 内科医院の建設にともなう関口地区の発掘調査 ――

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路７番50号

2004年３月31日

印刷所　キクラ印刷株式会社

富山県高岡市樋詰48-2

PRINTED WITH SOYINK　本報告書は環境に優しい大豆インクを使用しています。